The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	批判的社会言語学のメッセージ　はしがき
Author(s)	
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2018, 2017, p. 1-2
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/69998
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

はしがき

本プロジェクトは『批判的社会言語学の諸相』(2002 年度)、『批判的社会言語学の可能性』(2003 年度)、『批判的社会言語学の射程』(2004 年度)、『批判的社会言語学の展開』(2006 年度)、『批判的社会言語学の課題』(2007 年度)、『批判的社会言語学の実践』(2008 年度)、『批判的社会言語学の展開』(2009 年度)、『批判的社会言語学の領域』(2010 年度)、『批判的社会言語学の方法』(2011 年度)、『批判的社会言語学の構築』(2012 年度)、『批判的社会言語学の展望』(2013 年度)、『批判的社会言語学の軌跡』(2014 年度)、『批判的社会言語学の潮流』(2015 年度)、『批判的社会言語学のまなざし』(2016 年度) の延長線上にある。また、この間刊行した『「正しさ」への問いー批判的社会言語学の試み』(野呂香代子・山下仁、三元社、2001、新装版 2009 年)、『「共生」の内実ー批判的社会言語学からの問いかけ』(植田晃次・山下仁、三元社、2006、新装版 2011 年)、そして、3 年前に刊行した『ことばの「やさしさ」とは何かー批判的社会言語学からのアプローチ』(義永美央子・山下仁、三元社、2015 年) とも深い関連を持つ。さらに、2012 年度から全学的に開始され、山下が運営統括委員、植田がプログラム担当者に名を連ねている「未来共生リーディングプログラム」とも関連を持つものである。

2002 年に開始された本プロジェクトの出帆より 10 数年の歳月が流れた。この間、15 人が 51 本の論文･翻訳によって、上掲のように「批判的社会言語学」の「諸相」・「可能性」・「射程」・「展開」・「課題」・「実践」・「領域」・「方法」・「構築」・「展望」・「軌跡」・「潮流」・「まなざし」に取り組み、今年度は「メッセージ」をテーマとした。

2018 年、朝鮮民主主義人民共和国の金正恩委員長は大韓民国の文在寅大統領と歴史的な会談を行った。さらにアメリカ合衆国のドナルド・トランプ大統領との史上初の会談が行われようとしており、予断を許さない状況ではあるものの長きにわたった朝鮮半島の戦争状態に休止符が打たれようとしている。南北首脳や米国の大統領はどのようなメッセージを発し、我々はこれらのメッセージをどう捉えるのだろうか。一方、日本国内に目を向ければ首相経験者でもある財務大臣がセクシャルハラスメントを容認し、さらに重要な公文書の隠蔽や改竄が次々と発覚している。それにもかかわらず、極右政権は揺るがず、野党の支持率は低いままである。為政者の発するメッセージ、そしてそれに対峙する人々の発するメッセージから何が見えるだろうか。本プロジェクトは、このような現代社会を社会言語学の立場で、それぞれの「メッセージ」から批判的に捉えようとするものである。

山下論文は、批判的社会言語学の観点から語用論の分野で重要な役割を果たすポール・グライスの「協調の原理」を再考した。まず批判的社会言語学の「批判」がいかなるものであるかを考え、その後、主としてシュテフェン・レヴィンソンの『英語語用論』に記された記述をもとに「協調の原理」の問題点について考察した。表面的には丁寧でありながら、実際には協調を否定するような言説を「協調の原理」はどのようにとらえるのか、といった問題を指摘した。

呉論文は、被植民地支配などの歴史的経緯から複雑な言語状況が存在する台湾における言語使用の実態を調査したものである。まず、多言語社会である台湾の人口構成と、多言語教育の政策、とりわけ 1990 年代以降について示した。その上で、南部地域に位置する嘉義県在住の子どもたちに焦点を当て、実生活での言語使用をインタビューより分析した結果をまとめた。

植田論文は、中国の少数民族語としての朝鮮語を取り上げた。まず、1969 年以降に刊行された規範集（前身を含む）について原物資料に基づいて書誌を整理した上で、中国朝鮮語の規範、とりわけ 2016 年規範集での修正を手掛かりに、中国朝鮮語の規範化方針の転換の軌跡とその可能性について述べた。

読者の皆様からの忌憚なきご意見、ご批判などをお伝えいただけたら幸いです。

執筆者一同